「バグ、砂嵐へ。」

作演出・長野恵美

浅月孔明（３３）飛田修司…引き篭りカムバック！つくるの大好き！

三國備子（５８）かくたなみ…区役所の人っぽい人！つくる人大好き！

黄ちゃん（１２）孔明の元クラスメイト。初恋の人。

リュウ・パイセン（１７）孔明の元先輩。憧れの人。

浅月章依（６２）孔明の元保護者。逢いたい人。

薄暗い部屋。ブラウン管テレビの砂嵐の音。
孔明、四次元テレビを視ながら笑っている。
四次元テレビには、所謂、砂嵐が映っている。
【２０２０年７月・孔明の部屋】
孔明、ふと思い立ち、部屋を出る。
備子、扉をノックする。

備子　「孔明くん？・・・・・・浅月孔明くん・・・・・・？」

備子、恐る恐る部屋に入る。手には掃除道具。口元にはマスク。
部屋中を見渡し、思わず微笑む。部屋の掃除を始める。
孔明、水を持って部屋に戻ってくる。
備子、思わず壁に張り付き、壁と同化しようとする。
孔明、四次元テレビの前に座り、水を飲む。
備子、孔明を、まじまじと見つめる。

孔明　「何を見ている？」
備子　「！？」
孔明　「・・・・・・もしこの部屋に誰かが潜んでいるのであれば、
　　十中八九、そう思われたに違いない」

備子　「（小声で）正解」
孔明　「しかし、この部屋には俺一人しかいない。故に、この部屋は完成されている。いや、完結している。ここは、この物語の終着駅である」
備子　「（小声で）そうなんだ」
孔明　「ありとあらゆる悲しみが、憎しみが、悔しさが、寂しさが、この部屋には詰まっている。俺という形で収束している・・・・・・（笑う）素晴らしい」
備子　「（首を傾げる）」
孔明　「どうあがいても、絶望！！」

孔明、笑い転げる。
備子、戸惑いつつも、恐る恐る、孔明に、近寄る。

孔明　「（笑う）面白い・・・・・・実に面白い・・・・・・」
備子　「ねえ」
孔明　「面し」

孔明、備子に気付き、固まる。

備子　「何が面白いの？」
孔明　「・・・・・・（小声で）なんてこった」
備子　「え？」
孔明　「・・・・・・バグだ」
備子　「・・・・・・バグ？」

孔明、慌てて棚の奥に隠してあったガスマスクを顔に装着する。

備子　「大丈夫よ。私、ちゃんとマスクしてるから」
孔明　「（首を横に振る）」
備子　「あ、でもそうよね。こんな距離感だとまだ怖いわよね？ついうっかり（孔明から２メートル離れる）ほら、２メートル。ソーシャルディスタンス。これで何も怖くない」
孔明　「誰だあああああ！？」

間。

備子「私の事、覚えてないの？」
孔明「（首を横に振る）知らない。お前なんか、知らない」
備子「私は知ってる。孔明くんの事」
孔明「！？」
備子「浅月孔明くん。１９８７年４月２日生まれの３３歳。牡羊座のＡＢ型。元・引き篭もり」
孔明「は？」
備子「でも、漫画喫茶・サンリンボー池袋西武東口店でアルバイトとして社会復帰したのよね。偉いわー。なのに、コロナ禍で仕事がなくなっちゃって、引き篭もりに逆戻り」
孔明「あの」
備子「引き篭もりに逆戻り。引き篭もりに逆戻りって、言いにくいけど、言葉にすると、なかなか楽しいかも（ラップ調で）引き篭もりに逆戻り！引き篭もりに逆戻り！ＹＯ」

孔明、声にならない声を上げ、のた打ち回る。

備子「ねえ、それって、どんな感情なの？」
孔明「放っておいてください！」
備子「え、嫌」
孔明「放っておいてください！帰ってください！」
備子「絶対に嫌」
孔明「我儘！じゃあせめて名乗ってください！」
備子「本当に覚えてないんだー・・・・・・」
孔明「ごめんなさい！」
備子「三國備子です」
孔明「・・・・・やっぱり思い出せない。すみません」
備子「仕方がないわよ。名前を名乗ったのは、これが初めてなんだから」
孔明「そうか。初めてなら仕方がないか」
備子「備子って呼んで」
孔明「三國さん」
備子「備子」
孔明「貴女は」
備子「備子。備子よ？」

孔明「どうしてここに」
備子「とーもーこ」
孔明「備子さん」
備子「やだ備子さんだなんて恥ずかしいっ」
孔明「（舌打ち）あの、備子さんは・・・・・・どういう人なんですか？どうしてここに？」
備子「私は、区役所の人よ」
孔明「区役所？」
備子「引き篭もりの孔明くんの様子を見に来たの。このままじゃあいつまでたっても、社会復帰は難しいでしょう？」
孔明「区役所って、所属は？役職名は」
備子「私はね、貴方のお母様から頼まれて、ここに来たの」

間。孔明、備子を無視して四次元テレビを視る。

備子「本当よ？この家の鍵も、貴方のお母様から・・・・・・それ、何？」

備子、四次元テレビの画面を覗く。相変わらず、砂嵐しか映っていない。

備子「懐かしい。これ、砂嵐？地デジになってから初めて視たー」
孔明「・・・・・違います」
備子「違うの？」
孔明「これは、俺が発明した、四次元テレビです」
備子「四次元テレビ？」
孔明「（独白）一刻も早く、この部屋から立ち去って欲しいと思った。だから俺は、頭がオカシイ人間のふりをする為に、本当の事を話す事にした」
備子「それって、どんなテレビなの？」
孔明「その名の通り、過去・現在・未来、はたまた、別の世界線に至るまで、俺が視たいと思ったモノを視る事が出来る、凄いテレビです」
備子「何それ凄い！」
孔明「先程も、俺の曾孫達が池袋で四次元四天王に襲われている姿を視ていました」

備子「あらあ、大変じゃない」
孔明「はい。とても大変そうだったので（棚から四次元カメラと四次元ボックスを取り出す）この、四次元カメラとＺＯＯＭアプリを使って曾孫達と繋がり、この、四次元ボックス経由で、俺が暇潰しに創った発明品達を渡し、戦闘やら何やらをアシストしてやりました」
備子「孔明くん、昔から発明とか、大好きだったもんね」
孔明「え？」
備子「ねえ、どうやって創ったの？」
孔明「や、ヤフオクで見つけた額縁に・・・・・・これ以上は企業機密です」
備子「そっかあ。孔明くん、企業なんだねー」
孔明「（独白）いちいちムカつくなあ何なんだこのオバハン！？本当の事とはいえ、こんな、荒唐無稽な話をあっさり信じやがって。いくらなんでもおかしいだろ？」
備子「孔明くん？」
孔明「（独白）そうか。この人さっき自分の事、区役所の人だって言ってたな。嘘としか思えなかったけど」
備子「おーい」
孔明「（独白）適当に話を合わせて俺を懐柔し、この俺を、社会復帰させるつもりか」
備子「エッチな本、何処かなあ」

備子、いつの間にか、勝手に部屋を探っている。

備子「あ」

備子、エロ本を発見した所で孔明に止められる。
備子、慌てて孔明から距離を取る。

備子「ソーシャルディスタンス！！」
孔明「コンプライアンス！！」
備子「そっかあ。孔明くん、小さな女の子の事が」
孔明「コンプラココココンプライアンスー！！！？」
備子「ＹＯＹＯ」
孔明・備子「ココココンプラ・ソーシャルディスタンス」

孔明　「ラップじゃねえＹＯ！？（独白）三國備子。なんて、危険な女なんだ・・・・・・・！？」

備子　「孔明くんが悪いのよ？私の事、無視したりするから」

孔明　「（独白）とにかく！俺を社会復帰させようったってそうはいかないぞ」

孔明、再び棚を開けようとする備子を止める。

備子、慌てて孔明から距離を取る。

備子　「ソーシャルディスタンス！！」

孔明　「（独白）俺は俺だ！孤高の天才発明家・浅月孔明だ！俺は絶対に、このクズニート生活を諦めない！」

備子　「全く。昔と全然変わらないんだから」

孔明　「（独白）社会復帰なんか！絶対に！！してやるものか！！！」

備子　「孔明くん。愛してる」

孔明　「え？」

間。

孔明　「あの」

備子　「で？この四次元テレビは、どうやったら映るのかしら？」

孔明　「うつる？」

備子　「さっきからずっと砂嵐の画面じゃない」

孔明　「ああ・・・・・それ、実はもう映ってるんです」

備子　「ええ？」

孔明　「既に映ってはいますが、その四次元テレビ、俺にしか視る事が出来ないんです。俺以外の人には、砂嵐の画面にしか見えません」

備子　「へー」

孔明　「ちなみに、この四次元カメラも俺以外の人にはただのカメラです。この四次元ボックスも、俺以外の人にはただの箱です。あ、ＺＯＯＭは、ＺＯＯＭビデオコミュニケーションズ社が提供するＷｅｂ会議サービスですから、ＺＯＯＭだけでしたら、備子さんにも使用出来ますよ？」

備子　「どうしてさっきからドヤ顔なの？」

孔明　「（独白）さあ、ドン引きしろ。心底がっかりしろ！その瞬間、

俺はキレる。キレにキレまくってやる。俺の事、信じられないのであれば帰れ！！と。ありきたりな、ヒューマンドラマの様に！！」

備子「ま、別に良いか」

孔明「え？」

備子「ねえ。このテレビ、本当に、何でも視る事が出来るの？」

孔明「はい・・・・・でも、俺以外の人には砂嵐」

備子「じゃあー、孔明くんが、一番幸せだった時って、いつ？」

孔明「は？」

備子「あ、一番だと、パッとは思いつかないか。孔明くんが幸せだった時なら何でも良い。私、幸せそうな孔明くんが視たい！」

孔明「（小声で）それもカウンセリングの一環ってやつですか？」

備子「え？」

孔明「良いですよ。視せてあげます」

備子「ありがとう」

孔明「ただし、先程も言いましたけど、映像は」

備子「良いわよ、砂嵐のままで。私には砂嵐でも、孔明くんには、ちゃんと視えているんでしょう？」

孔明「・・・・・はい」

備子「ちゃんとソーシャルディスタンスも守るから」

孔明「ありがとうございます」

孔明、チャンネルを合わせる。備子、うきうきする。

【～２０００年３月・孔明の部屋】

黄声「とんとんとん！とんとんとん！こうめえくん、お勉強教えてー！とんとんとん！とんとんとん！」

備子「もう始まってるの？」

孔明「小学６年生の３月。俺には、好きな女の子がいました」

備子「あらあ」

黄声「とんとんとん！とんとんとん！」

孔明「黄ちゃん！とんとんとんは、口で言わなくて良いんだよ！とんとんとんって、目の前の扉をただノックすれば良いんだよ」

黄声「あ、そっかあ！こうめえくんはやっぱり、てんさいだね！」

黄ちゃん、扉をノックする。

黄声　「こうめえくん！お勉強教えてー！」
孔明　「（小学６年生になり）よっしゃばちこーい！」

黄ちゃん、部屋に入って来る。
口元にはマスク。手にはノートを持っている。

黄　「がちゃ。あ、がちゃって自分でも言っちゃった。あー！こうめえくんだー！！」
孔明　「黄ちゃんだー！」

孔明と黄ちゃん、はしゃぐ。孔明、黄ちゃんを椅子に座らせる。

孔明　「大丈夫？息切れ凄いけど」
黄　「うん大丈夫。けほけほ」

黄ちゃん、ノートを開く。

孔明　「黄ちゃんは、クラス一の馬鹿でした。そして、常に風邪気味でした」
黄　「けほけほ。うーん。謎。こうめえくーん。たし算教えてー」
孔明　「黄ちゃんはクラス一の馬鹿で、俺は、クラス一の天才でした。しかも名前も少し被ってる。だから、黄ちゃんはいつも、俺にべったりでした」
黄　「黄ちゃん馬鹿じゃないよ？だって、いつも風邪ひいてるもん。馬鹿は風邪をひかないんだってお父さん言ってた。こうめえくん知ってたー？けほけほ」
孔明　「うん。知ってたよ」
黄　「さすがこうめえくん！天才だー」
孔明　「うん！俺、天才だよー！」
黄　「こうめえくん好きー！」
孔明　「黄ちゃん好きー！」
黄　「こうめえくん、スキー！」

孔明、エアスキーを始める。黄ちゃん、笑う。

黄　「こうめえくん、面白ーい。けほけほ」
孔明　「黄ちゃんは、俺にべったりでした。俺の事を尊敬してくれていました。天才過ぎるが故に、周りから敬遠されていた俺の事を、心の底から好きだと言ってくれた。彼女の事を好きになる理由は、それだけで十分でした」
備子　「あらあらあらあ。もしかして、初恋の相手だったの？」
孔明　「はい！初恋でした！」
備子　「（悶える）は・つ・こ・い！」
孔明　「黄ちゃーん！俺は、君の為なら俺は何だってやる！君を生涯養ってやる！だから、小学６年生で、たし算が出来ない事位気にするな！黄ちゃんはただ、笑ってくれさえいれば」
黄　「ごめんなさいこうめえくん。黄ちゃん、今日でお別れなんだ」

間。孔明、エアスキーを止める。黄ちゃん、ノートで顔を隠す。

孔明　「お別れ？」
黄　「黄ちゃんね、中学生になったら、みんなと違う学校に行くの。だから、お引っ越しするの。こうめえくんと、同じ中学校には行けないの。寂しいの」
孔明　「黄ちゃん、俺は」
黄　「でもこうめえくんは天才だから寂しくないよね？」
孔明　「・・・・・うん。俺、天才だよ」
黄　「良かった。バイバイ。こうめえくん。けほけほ」

黄ちゃん、ノートで顔を隠しながら部屋を出る。間。

孔明　「黄ちゃんとは、これっきりでした」
備子　「これっきり？手紙のやりとりもしなかったの？」
孔明　「手紙は何度も出しました。しかし、黄ちゃんからの返事は、いつまで経っても、ただの一通も、届きませんでした」
備子　「そうだったの」
孔明　「黄ちゃんからの返事は来ませんでしたが、黄ちゃんの、お母さんからの手紙は来ました」
備子　「黄ちゃんのお母様から？どうして」
孔明　「これ以上、私達家族を馬鹿にしないでください。あんな漢字ばかりの手紙、黄が読める訳ないじゃないですか。と」

備子「酷い」
孔明「酷くありません。黄ちゃんのお母さんはお母さんでいっぱいいっぱいだったんです。それに、あんなに勉強を教えていたのに、そんな事にも気付けなかった俺が、一番悪いんです」
備子「孔明くんは悪くないわよ。それに、孔明くんだってまだ、黄ちゃんと同じ、子供だったのに」
孔明「次に行きましょう！」
備子「え？」

孔明、四次元テレビのチャンネルを合わせる。

孔明「俺が、一番幸せだった時が視たかったんですよね？確かに黄ちゃんと過ごした日々は幸福そのものでしたが、あれじゃあまりにも後味が悪すぎましたねごめんなさい」
備子「私、そんなつもりじゃ」
孔明「あ、これなんかどうですか？俺の高校時代」
備子「孔明くん」
孔明「今度こそ、絶対に、幸せですから」
備子「・・・・・・」

孔明、チャンネルを合わせる。備子、そわそわする。
【～２００５年３月・高校の化学室】
リュウ・パイセン登場。口元にはマスク。手には科学の本。

リュウ「孔明」
孔明「（高校２年生になり）リュウ・パイセン！ぺらぺらぺらぺーら」
リュウ「ぺらぺーら。ぺらぺらぺーら」
孔明「ぺら？ぺらぺらぺら？ぺらぺらぺらアルゴリズム」
リュウ「ぺらー！ぺーらぺらぺらぺらコペルニクス」
リュウ・孔明「（笑い合う）ぺっらっらっらっらっらっら」
リュウ「ごほごほ」
孔明「パイセーン！！こちらへどうぞー！！」
リュウ「ありがとう。すまない」

孔明、リュウ・パイセンに椅子を勧める。
リュウ・パイセン、格好良く椅子に座り、科学の本を開く。

孔明　「リュウ・パイセンは、当時俺が所属していた、科学部の部長でした。やはり彼も、常に風邪気味でした。あ！パイセン、見てくださいよこれ！夏休みに創った、超ひも理論です！」

リュウ「でかした孔明！ごほごほ」

孔明　「パイセーン！！」

備子　「リュウ・パイセンって、その人、中国人なの？」

孔明　「リュウ・パイセンは、純日本人です。しかし何故か、先輩や部長ではなく、パイセンと呼ばせる事に拘っていました」

備子　「あー。いるいるそういう人ー」

リュウ「孔明。何故俺が、いつも風邪気味なのか。その答え、お前に分かるか？」

孔明　「分かりません！」

リュウ「ハハッ！孔明の癖にお馬鹿さんだなあ。それはな？俺が、毎日１０時間、今は受験生だから１日２０時間！寝る間を惜しんで、勉強をしているからさ！」

孔明　「すげー！かっけー！流石リュウ・パイセン！毎晩１０時間とか２０時間とか、そんなの、俺には絶対に無理っす！」

リュウ「ハハッ！俺の努力値は、宇宙だ」

孔明　「しびれるー！」

リュウ「目指せ！ノーベル化学賞ごほごほ」

孔明　「パイセーン！！」

リュウ・パイセン、孔明を制し、死にそうな顔で本を読む。

孔明　「勉強のし過ぎで、常に瀕死状態だったリュウ・パイセンの事を、俺も他の部員達も、心の底から尊敬していました。勉強馬鹿なのに、全ての人に対して優しくて恰好良くて、だけど、何処か親しみやすい。まさに、俺とは正反対の存在でした」

備子　「孔明くんだって、優しいし、カッコいいわよ？」

リュウ「孔明」

孔明　「はいパイセン！」

リュウ「どうしてお前は孔明なんだ？」

孔明　「急にロミジュリみたいな事を言いますね」

リュウ「すまない。急にロミジュリみたいな事を言い出して。ごほごほ。お願いだ。ごほごほ。答えてくれ。ごほごほ」

孔明　「えっと、どうしてと言われましても・・・・・・名前の由来なら、親父が、諸葛亮孔明のファンだったからで・・・・・・パイセン？」

リュウ・パイセン、痙攣している。

孔明　「大丈夫ですか？あの、保健室に」

リュウ「触るな！」

間。リュウ・パイセン、ふらふらと出て行こうとする。

孔明　「パイセン」

リュウ「・・・・・・死ねば良いのに」

孔明　「え？」

リュウ「ハハッ」

孔明　「・・・・・・それは、かつていじめっ子達から、耳に胼胝が出来る程、聞かされてきた言葉でした。死ね。死ねば良いのに・・・・・・なのに、いい加減、聞き飽きていたはずの言葉だったのに、その時の死ねば良いのにだけは、未だに俺」

備子　「孔明くん！！もう良いから」

孔明　「後日！リュウ・パイセンから、ｅメールが届きました」

リュウ・パイセン、ｅメール（手紙）を読み上げる。

リュウ「孔明、あの時は、本当にすまなかった。受験前で気が立っていて・・・・・・いや、今更言い訳しても仕方がないか。孔明、俺は正直、お前に嫉妬している。お前は、俺達みたいな凡人とは違う。本物の天才だ。いつか必ず、ビックになる男だ。なのに俺は、自分が先輩だからというだけで、凄すぎるお前に対しても、先輩面をしようと必死になって・・・・・・なんて恥ずかしい男なんだ！こんな、無様でウジ虫みたいな俺の事なんか、さっさと忘れてくれよな？いや、お前の事だ。もうとっくに忘れて、前を向いているか。ハハッ」

孔明　「パイセン、違うんですパイセン」

リュウ「達者でな」

孔明　「俺は、俺の事を煙たがらず、他の後輩達と同じ様に接してく

れた貴方に、本当に救われていたんです！大好きだったんです！！俺はずっと」

リュウ・パイセン、出て行く。間。

孔明「貴方みたいに、なりたかったんです・・・・・・」
備子「・・・・・これが、孔明くんの、幸せだった時」
孔明「はい。これが俺の、幸せだった時です」
備子「・・・・・・」
孔明「黄ちゃんも、リュウ・パイセンも、文字通り、全力で俺にぶつかって来てくれました。同じ人間として、接してくれました。幸せでした。幸せ過ぎて、警戒心を忘れ、距離が近くなりすぎてしまい、気づいた時にはもう、手遅れになっていました・・・・・・本当に、もっと早く気づくべきでした」
備子「気づくべきでしたって、何に？」
孔明「俺の幸せは、周りの不幸に支えられている。という事にです」
備子「それは違うわ！絶対に違う！！」
孔明「違いませんよ」
備子「黄ちゃんも、リュウ・パイセンも、私から見たら、十分幸せ者に視えたわよ？いや、厳密には、砂嵐しか視えてなかったけど！むしろ、孔明くんの方が」
孔明「それは貴女が結果しか視ていないからです！黄ちゃんはともかく、パイセンは、身体をブッ壊してまで俺について来ようと・・・・・・今の俺がこんな状態なのは、周りの人間達を、無自覚に不幸にしてきた事への代償なんです。俺は、この己の罪を、己の不幸を以って、償わなければならないんです」
備子「何よそれ。意味が分からない」
孔明「分からなくて結構です。貴女はただの、区役所の方なんですから」
備子「・・・・・どういう意味？」
孔明「区役所の方なら区役所の方らしく、お約束のお役所仕事だけやれば良いと言っているんです」
備子「お約束の、お役所仕事？」
孔明「貴女、最初に言ってたじゃないですか？俺の母さんから頼まれてここに来たって。つまり、そう言う事ですよね？」
備子「そういう事って、どういう事？」

孔明「まだしらを切るつもりですか」
備子「私、ただ、孔明くんの幸せそうな顔が見たくて」
孔明「母さんが死んだのに俺がまだ引き篭もってるから！！
・・・・・だから、ここに来たんですよね？死ぬ前の、
母さんに頼まれて」

間。

備子「そうよ」
孔明「やっぱり。社会復帰ならしませんよ？俺はクズニートらしく、
潔く、この部屋で野垂れ死ぬと決めているんです。だから」
備子「社会復帰なんかどうでも良い！！」
孔明「はあ？」
備子「社会復帰なんかどうでも良い・・・・・いや、どうでもは
良くないけど。ただ、私は、孔明くんに・・・・・」
孔明「何ですか？」
備子「・・・・・ごめんなさい」
孔明「は？」
備子「私、孔明くんに嘘を吐いてた。区役所の人なんて真っ赤な嘘！」
孔明「じゃあ何なんですか貴女は？宗教の人？ボランティアの人？」
備子「私は・・・・・近所のおばちゃんよ！！」

間。

孔明「はい？」
備子「だから、私はただの、近所のおばちゃんよ！章依さんの、あ、
孔明くんのお母さんの、お茶飲み友達！孔明くんとは子供の
頃に逢った事があるというか、なんなら、章依さんのお葬式
にもいたわよ私！？どう？これで文句ない！？」
孔明「そんなドヤ顔で言われましても・・・・・あの、じゃあ、
貴女は一体」
備子「待って、ソーシャルディスタンス。２メートル以上近寄らな
いで」
孔明「ごめんなさい。ってえ？何？貴女は一体、俺の、何？」
備子「私はただの、近所のおばちゃんよ！」
孔明「それはもう分かりましたから！だから、あの、えー、貴女の

目的は、何なんですか？」

備子　「モクテキ？」

孔明　「そんなキョトンとしないでくださいキョトンとしたいのは俺の方です。わざわざ不法侵入までして、貴女の目的は一体、何なんですか？」

備子　「私の、目的・・・・・・私の、目的は・・・・・・」

ラップバトル、開始。

備子　「三國備子はただのおばちゃん
お前の近所住むただのおばちゃん
Ｂｕｔ　お前の母ちゃんとはお茶飲みＦｒｉｅｎｄ
Ｓｏ　ただのおばちゃんではないんですね
私は孔明くんの事もうずーっとこーんな小さな頃から見てた
見守ってた見つめていたの！！章依さんは孔明くんの事
をどうしようもない馬鹿息子だとか言ってたけど、うふふ！

孔明　ｉｓ　備子の光　ＹＯ」

孔明　「えー、いきなり備子の光とか言われましても
おい！気持ち悪いんだよストーカーＢＢＡ！
てか、何で嘘吐いたクレイジーＢＢＡ！
区役所の人だって大迷惑だぞ？
今なら目を瞑っててやるから
俺の眼が黒いうちにこの部屋から出て行け！！！

備子　二度と俺の前に姿を現すな
三國備子　ｉｓ　バグＢＢＡ」

孔明　「バグＢＢＡって何よ！？ちゃんと日本語で喋りなさいよ！？
私も知りたい私の気持ち
浅月孔明　ｉｓ　備子の何？
友達の息子？それは分かっている
知りたいのは、そんな事じゃアリマセーン
私は孔明くんと、どんな関係になりたいの？
彼の母親代わり？違う。彼の恩人？違う。まさか、
彼の恋人とか言わないでよね？」

孔明　「あの、頭大丈夫ですか？・・・・・・・・
おい！耳の穴かぽじってよーく聞け！
浅月孔明　ｉｓ　天才　Ｓｏ　天災

地震雷火事親父浅月孔明とは
俺！　触れる者皆傷つけた
しまいにゃ母親すら死んじゃった！
俺に近寄るなら、ソーシャルディスタンス。ね？
２メートル以内は即・Ｄｅａｄ！！」

備子「章依さん分かってた　だから私に託した
私に何かあったら、馬鹿息子の事、よろしくね？って
自惚れんなざけんな　人は皆
大河の一滴　最可愛（さいかわ）の宝石
しんどくて当然　輝いて当然
勝手に諦めんなお前も私も
幸せを知る為に、産まれてきたんだよ？
共に歩もうぜ　Ｂｒａｎｄ　ｎｅｗ　ｗｏｒｌｄ」

孔明「うあああああああああ！！！」

孔明、頭を抱えて崩れ落ちる。間。
備子、勝者のポーズ。

孔明「俺だって・・・・・最初から、諦めていた訳じゃない・・・・・・
俺だって本当は、幸せに、なりたかった・・・・・・」

備子「うん」

孔明「でも、みんな、俺の前からいなくなった。黄ちゃんも、
リュウ・パイセンも・・・・・・母さんも」

備子「運命だったのよ」

孔明「運命で人が死んでたまるか！」

備子「死ぬのよ。人は、運命で産まれて、出逢って、別れて、死ぬ
の。最期にはみんな、一人ぼっちになるの。私だってそうよ」

孔明「・・・・・・備子さん。どうして、自分が区役所の人だなん
て、雑すぎる嘘を？」

備子「とにかく部屋に入っちゃって、自分は区役所の人だって言え
ば、孔明くんも、直ぐには追い出さないと思って」

孔明「はあ」

備子「私ね、今ではこんなだけど、昔は結構、人見知りが激しい、
無口な子供でね？周りに適応する為に、必死に普通を演じて
いたの。普通なら、誰からも文句を言われずに済むからね」

孔明「そうですね」
備子「だからかしら。私が、孔明くんに惹かれたのは。章依さんが、孔明くんの愚痴を言う度に本当は、どうしようもなくなんかないですよ！って言ってやりたかった。でも、子供に恵まれなかった私が、他人の子育てに口を出すだなんてって、結局、何も言えずにいたわ。それでも、どんどん成長して行く孔明くんを町で見かける度に、私の胸は高まった。私にとっての貴方は、光そのものだったのよ」
孔明「・・・・・暇な人ですね」
備子「そうね。でもだからこそ、私は貴方に出逢えたわ。章依さんに病気が見つかって、貴方が引き篭もりを辞めて、漫画喫茶で働きだした時も、コロナのせいで、貴方が再び無職になった時も、病院の面会禁止が決まって、章依さんが、一人ぼっちで亡くなった時も・・・・・・私はずっと、貴方に声を掛けたくて・・・・・・やっと、かけられた・・・・・・」

備子、俯く。

孔明「備子さん？」
備子「分かった」
孔明「はい？」
備子「分かっちゃった（笑う）」
孔明「あの・・・・・・」
備子「私、孔明くんの、親友になりたかったんだと思う」
孔明「シンユウ？」
備子「駄目？」
孔明「駄目、というか、急にそんな事を言われましても」
備子「（孔明を無言で見つめる）」
孔明「・・・・・・分かりました」
備子「やった！じゃあ、とりあえず、章依さんに、逢いに行こうか！」
孔明「はい・・・・・・え？」
備子「私達が親友になった事、ちゃんと報告しなくっちゃ。章依さんも、死んでも死にきれないでしょう？」

備子、四次元テレビを勝手に弄る。

孔明「ちょ、ちょっと待ってくださいてか勝手に触らないでください壊れる！」

備子「ソーシャルディスタンス！！」

孔明「それもう良いですから。あの・・・・・・え？母さんに報告って・・・・・・流石にこのテレビ、あの世とはちょっと」

備子「違う違う。死ぬ前の、入院中の、章依さんによ」

孔明「え？」

備子「え？じゃないわよ。その為に創ったんでしょう？その四次元テレビとかカメラとか」

孔明「どうしてそれを？」

備子「コロナで面会禁止になっちゃったじゃない？孔明くんの事だから、章依さんの為にこういうの、発明したんだろうなって思って」

孔明「・・・・・結局、完成したのは、肝心の母さんが死んでしまった後でしたけどね」

備子「じゃあ尚更よ！今からでも逢いに行きましょう！」

孔明「逢いに行くって、過去や未来は視る事は出来ても、干渉するのはまだ無理ですよ」

備子「えー？じゃあ、様子を見に行くだけ。駄目？」

孔明「それは・・・・・・そんなの、今更、何の意味が」

備子「あ、もしかして、怖いの？」

孔明「はあ？」

備子「大丈夫よ。私が傍に居るから」

孔明「そういう問題じゃ」

備子「大丈夫！章依さんは孔明くんの事、孔明くんが思っている以上に、愛しているわ」

孔明「え？」

備子「だから信じて章依さんの事。私の事。砂嵐の向こう側はきっと、貴方が想像している以上に」

曲。備子、口パクで孔明に何かを告げる。

章依、リズムにノリながら登場。手にはアルバムとラジカセ。

口元にはマスク。

孔明と備子、四次元テレビの前に座る。

【２０２０年５月・章依の病室】

章依、ノリノリ。しまいには感涙している。

章依　「ううう・・・・・・チョナン・カン・・・・・・・・剛・・・・・・・・
　　サランヘヨー！！」
孔明　「あいつまた・・・・・・・！」
備子　「何が映っているの？」
孔明　「恥ずかし過ぎて言いたくありません」
章依　「サランヘヨー！！」
孔明　「だから病室で叫ぶなよ！」
備子　「え？」

ノック音。

章依　「あ、ごめんなさい。つい夢中になっちゃって」

章依、ラジカセを止め、椅子に座り、アルバムを開く。

章依　「ほら、入院生活って、結構暇じゃない？あの子も来られなくなっちゃったし（架空の看護師に向かって）え？（笑う）今は全然可愛くない可愛くない！ただの髭面のおっさんよー」
孔明　「可愛くなくて悪かったな」
章依　「あ、看護師さん、もしまだ独身だったら、うちの息子、どう？」
孔明　「止めろー！！」
章依　「あ、彼氏いるの？そりゃそうよね。貴女くらい美人だったら普通に彼氏いるわよね（笑う）孔明、残念だったわね」
孔明　「残念なのは、お前の思考回路だ・・・・・・」
備子　「（笑う）」
孔明　「ちょっと」
備子　「ごめんなさい。章依さんらしいなって思って」
孔明　「はあ？視えてないんですよね？」
備子　「視えてないわよ。伝わってきただけよ」
孔明　「はあ・・・・・・」

章依、アルバムを捲る。

章依　「可愛かったなあ・・・・・・この頃は本当に・・・・・・
　　いや、そうでもなかったか」

孔明「おい」

章依「生意気な頑固者で、ちょっと頭が良すぎるだけなのに、いつも周りを見下して。私の話なんかちっとも聞いてくれなかったなあ。こっちは一人でアンタの事を育ててやったってのに・・・・・・もうすぐ子育てともオサラバだって思ってたら、また引き篭もりになっちゃうし・・・・・・アンタが自立した後、一人でハワイにでも行こうと思ってたのになあ。もう、行けないんだろうなあ・・・・・・」

孔明「・・・・・・」

章依「本当、いつまで経っても、どうしようもない子」

章依、優しく微笑む。孔明、驚く。

備子「どうしたの？」

孔明「どうして・・・・・・」

章依「私の人生、殆どアンタ一色だったわね・・・・・・楽しかったなあ」

章依、泣く。曲。

章依「ご飯、ちゃんと食べてるの？お風呂も毎日ちゃんと入ってる？眠れないとか死にたいとか、しんどいなら面倒臭がらずに病院に行くのよ？お母さんはもう、アンタの為に何にも、何にもしてやれないんだからね？」

孔明、泣く。

備子「孔明くん」

孔明「創る！」

備子「え？」

章依「逢いたいなあ」

孔明「俺、タイムマシン、創る！タイムマシン創って、母さんに逢いに行く絶対！」

備子「うん」

章依「無理かなあ」

孔明「無理じゃないよ！俺まだ、母さんにありがとうって言ってな

い！嫌だ！こんなお別れ嫌だ創る！絶対！死んでも創る！」

備子　「うん。創ろうタイムマシン！孔明くんなら、絶対に創れるよ！」

孔明　「頑張る。俺、超頑張るから」

章依　「頑張んなさいよ」

孔明、顔を上げる。孔明と章依、見つめ合う。

終わり。